

2. 高原野菜産地の農地保全と産地の継続に向けた支援

(対象：吾妻農業事務所旧普及指導課)

【評価できる点】

- キャベツの可変施肥について、大変評価できると思う。課題の設定は、現状、直近の農業情勢を捉えたテーマであり、解決方法や対象の選定等適切であると思う。
- ドローンの活用やグリーンな栽培体系への転換サポートの活用等、目標達成に向けた活動の工夫が随所に見られる。今後は施肥マップの作成を予定されているなど、具体的に検証されており、他地域のモデルになるような取組事例であると感じた。
- 総体的に国の指針に沿った取組として、特に現地生産者の経営改善にも訴求し得る普及指導活動内容であり、管内の生産者が経営継続をする上で非常に重要な成果が共有されていると考える。
- かなりの規模感で実証実験が行われており、技術普及に対する期待が持てる。
- 表土流亡対策は産地の大きな課題であり、今回の取組は当面の救助策になり、産地を元気づけるものと思う。

【改善・強化に向けた検討事項（意見・要望と対応策）】

1 課題や目標設定に関すること

【意見・要望】

なかなか緑肥の導入が進んでいないと感じるので、今後の対応を何か考えているか。

【回答】

現在、緑肥は円安などの影響で種子価格が上がり、生産者の負担が大きくなっているため、緑肥利用のブレーキとなっています。また、みどり戦略で全国的に緑肥利用が進んでいることから、産地間で種子の争奪が起きています。なお、吾妻西部の緑肥はキャベツ等作付け前後の短期輪作であり、その効果を考慮すると作付け面積の25%程度が物理的な緑肥作付け限界と考えられるので、それに近づけるべく啓発活動を継続しています。

加えて、長野原係では、緑肥の効果を損なうことなく、種子の播種量を節減するための実証ほを設置して検討中です。

また、可給態窒素（有機質分解由来の窒素）を利用した可変施肥などが普及することでコスト軽減となるので、それを緑肥に回すことができるよう引き続き啓発を行っていきます。

【意見・要望】

1品目への依存だけではなく、複数品目の経営支援の必要性を感じるので、御対応をお願いしたい。

【回答】

今回はキャベツやハクサイの課題について説明させていただきましたが、スイートコーンやベニバナインゲンの振興についても、別課題で普及計画に位置づけ活動しているところです。また、ズッキーニについては、高冷地で換金能力の高い果菜類であるため、生産技術を中心にサポートしているところです。今後とも、これらの活動を連携して継続していきます。

2 活動内容に関すること

【意見・要望】

是非、永続的に野菜生産が行える技術の開発を続けて欲しい

【回答】

国や県の試験研究等とも連携して取り組み、その普及に努めます。

【意見・要望】

引き続き表土維持の基本的な取組を第一に、産地自ら取り組むよう、指導をお願いしたい。

【回答】

今後も、国や県の試験研究並びに、孀恋村、JA、生産者とともに連携した取組を継続していきます。

【意見・要望】

天候不順や環境が変化する中で、多様できめ細かいサポートが必要になっていると思う。例えばLINEを活用したリアルタイムでの病虫害診断や対策等についてスピード感をもった情報提供ができないかと思う。

【回答】

現在、各普及指導員にはタブレットが配布されており、タブレットを活用した病虫害診断や温湿度等データの収集と解析、農業に有用なアプリの活用など、新たな手法を用いた迅速な普及活動を実践してきているところです。

また、LINE ワークス等を活用した生産者との意見交換など、連絡用のツールとしても活用しています。

今後もこれら新たなツールを活用しながら、スピード感を持った生産者への支援を行ってまいります。

【意見・要望】

支援事項が二つあるが、時間の関係で一つの支援事項に絞ったということであるが、この場合、今回の評価が課題全体の評価とは言えないのではないかと

【回答】

もう一つの課題である難防除害虫対策については、JA婦恋村、全農ぐんま、農薬メーカー、病虫害専門員、試験研究、病虫害防除所等の関係機関と連携して取り組んでいるところです。この活動では、難防除害虫であるコナガの薬剤感受性を明らかにし、生産者へ情報をつなぐことが毎年行われるので、キャベツの生産安定に寄与しているところです。

また、この関係機関のつながりがあることで、近年侵入が警戒されているテンサイシストセンチュウ対策についても、速やかに共通認識を形成することができています。

産地に対して提供できる情報量や、早期に侵入警戒態勢がとれていることなどから、「産地の継続に向けた支援」としての成果は十分に得られていると考えます。

野菜花き課追記

長野原係の取組のうち、もう一つの課題のコナガ等の病虫害対策の取組についても、薬剤感受性の把握やローテーション散布の生産者への実践等、関係者と一体となって推進し、一定の成果を出しているものと考えます。

今回の長野原係の発表については、化学肥料低減や緑肥の取組だけで、発表時間を大幅に超過してしまうことが見込まれましたので、ここ数年で顕著な実績をあげている内容に絞ってご説明させていただきました。